

GPAI 仕事の未来：Future of Work Survey Report 2024

日時	2025 年 3 月 13 日（木）16:00-18:00
会場	Zoom ウェビナー
主催	東京大学国際高等研究所東京カレッジ
共催	東京大学未来ビジョン研究センター 同志社大学働き方と科学技術研究センター 東洋大学総合情報学部
協力	日本ディープラーニング協会
後援	総務省、経済産業省

GPAI「仕事の未来」作業部会と日本における調査について

GPAI（Global Partnership on AI、AI に関するグローバルパートナーシップ）とは、人間中心の考え方に基づく「責任ある AI」の開発・利用の実現に取り組む国際的なイニシアティブである¹。GPAI にはいくつかの作業部会が設置されており、そのうちの一つに「仕事の未来（Future of Work）」作業部会がある。この作業部会のプロジェクトの一環として、仕事の現場に AI が導入されていく中で私たちの働き方がどのように変化していくのかについて、現場の状況を国際議論に反映することを目的に、学生主体のインタビュー調査による参加国における継続的な事例の収集が行われてきた。複数の大学からの参加による日本チームも、2021 年度よりこの調査に加わっており、2024 年度は日本チームとしての 4 年目の活動となった。

本イベントでは、2024 年度に実際に「仕事の未来」の調査に関わった学生と教員が登壇し、次のようなプログラムで、日本で行われた調査の概要や得られた知見の一部を紹介するとともに、調査の意義や課題について議論を行った。

1. 開会挨拶
2. GPAI Future of Work 紹介
3. 日本の調査概要報告
4. 学生によるパネルディスカッション
5. 教員によるパネルディスカッション
6. 閉会挨拶

1. 開会挨拶

本イベントは、江間有沙・東京大学准教授の開会挨拶から始まった。イベント全体の流れに関する説明があり、その中で、後日公開予定の報告書についての言及もあった。

¹ GPAI ウェブサイト: <https://gpai.ai/>, <https://www2.nict.go.jp/gpai-tokyo-esc/>

2. GPAI Future of Work 紹介

次に、GPAI「仕事の未来」2020-2021 年共同議長である原山優子・東北大学名誉教授より、GPAI の取り組みについて説明があった。

GPAI では、これまでに推進されたさまざまなプロジェクトにより、コミュニティ内でのレポート共有や意見交換が行われ、AI 導入のインパクトに関する議論が進められている。また、毎年開催されるイノベーションワークショップでは、ワーキンググループを超えたエキスパート同士の意見交換が行われており、2025 年は東京の専門家サポートセンターが主催する予定である²。

特に「Future of Work (仕事の未来)」作業部会のプロジェクトの一つである「Empower AI Workers」では、日本、メキシコ、アメリカの学生コミュニティを形成し、企業インタビュー調査を行う仕組みが構築されている。この取り組みは主に学生コミュニティ間の交流も目的の一つとしており、日本が最も長い歴史を持つ組織である。

GPAI は現在、OECD との統合パートナーシップにより 1.0 から 2.0 への移行を進めており、2025 年のプロジェクトとして GPAI 本体によるトップダウン型のプロジェクトと、エキスパート提案による GPAI アソシエイトプロジェクトの 2 つの枠組みを設けている。日本の学生コミュニティは、2025 年のプロジェクト提案として、GPAI アソシエイト枠内での「Student Community」プロジェクトを申請中である。

今後の社会でリーダーシップを取る若い世代が自らの視点で考え、現場と議論を重ねながら未来を構築していく活動が重要であることは GPAI も認識している。今後も、その取り組みを支援する枠組みをさらに整備していく予定である。

3. 日本の調査概要報告

続いて江間准教授より、2024 年度に日本チームが実施した調査の概要について説明があった。今年度の調査では、同志社大学から計 33 名(うち藤本研究室:18 名、勝野研究室:15 名)、東洋大学から 4 名(中野研究室)の学生が主体となり、2024 年 4 月からプロジェクトが本格始動した。また今年度は初の試みとして、Student Gathering というイベントも開催され、日本チームだけでなく海外チームも交えた学生同士での交流・意見交換が実現した³。

今年度のインタビューは、11 産業分野(IT、情報・通信、ソフトウェア、金融、食品、酒造、製造、物流、エンターテインメント、翻訳、官公庁・自治体)にわたる 34 件が実施された。質問項目としては、導入されている AI システムの概要、その導入に至る経緯、問題が発生した場合の対処法などが含まれている。また、調査した企業/自治体の AI システムを GPAI のカテゴリー定義(表 1)に沿って分類すると、「デジタル・コワーカー」が全体の半数を占め、次いで「人の代替」が 42%となっている(図 1)。GPAI では、学生が主体となって、調査する企業/自治体を決めていることから、江間准教授は、「人の代替」や「デジタル・コワーカー」にカテゴリー分けされる AI システムについて、ニュースで取り上げられる機会が多いために、学生の目に留まり、このような比率になったのではないかと推察した。

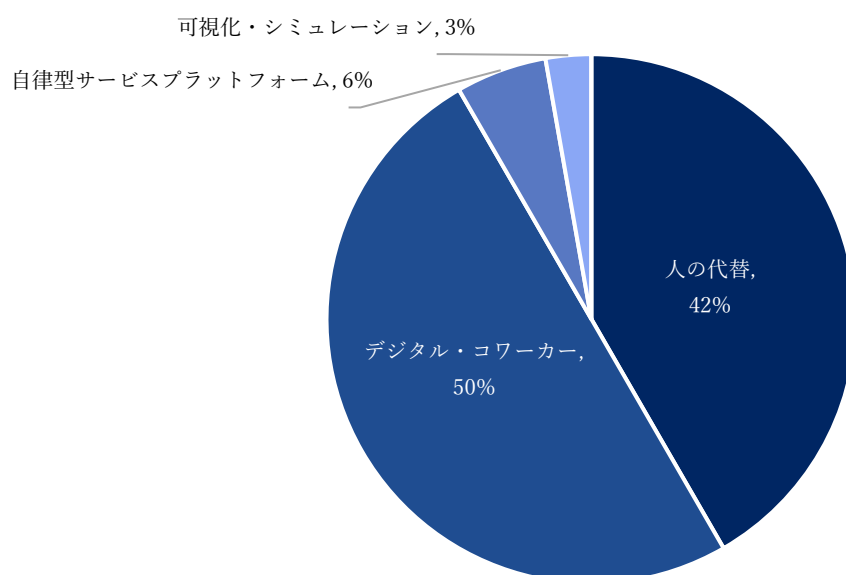
² 5 月末に開催予定: https://www2.nict.go.jp/gpai-tokyo-esc/news/20250124_01/

³ 実施報告: <https://drive.google.com/file/d/1DqTUJfKWF5eAsdylSjm8jez4m4lFnuj8/view?usp=sharing>

表 1: GPAI 調査における AI システムのカテゴリ

人の代替	<i>Servant Proxies</i>
他の人、機械、インフラとのサービス関係において、人の認知作業を代替するソリューション (例：スマートホームハブ、自動運転車、販売・接客分野のデジタルアシスタント、介護ロボット、コンシェルジュロボット等)	
デジタル・コワーカー（知識・情報の提供等）	<i>Digital Coworkers</i>
意思決定や不確かな問題の解決を支援するために知識や情報を提供することで、人の認知を拡大／支援するソリューション	
自律型サービスプラットフォーム	<i>Autonomous Operations Platforms</i>
技術サービスやビジネスサービスを提供する自律的なサイバーフィジカルプラットフォーム (自動化された工場や倉庫、自律型輸送システム等)	
可視化・シミュレーション（デジタルツイン等）	<i>Virtualization and Management of Assets & Processes</i>
様々な資産（建物、機械、都市などの有形資産／プロセス、システムなどの無形資産等）に係る可視化・シミュレーション環境（デジタルツイン）を作成し、様々な操作（事象予測、構成最適化等）を実行できるソリューション	
標準開発ツール・プラットフォーム	<i>Common Tools & Platforms</i>
他のアプリケーション（AI 開発に特化した機械学習コンポーネントやローコード環境）からのソリューション開発を容易にする標準的な開発ツールとプラットフォーム	

図 1: 調査したケースのカテゴリ毎の割合



カテゴリー	n
人の代替	15
デジタル・コワーカー	18
自律型サービス	2
シミュレーションの可視化	1
標準開発ツール・プラットフォーム	0

4. 学生によるパネルディスカッション

パネリスト:

- 佐藤裕章 東洋大学学部生（総合情報学部総合情報学科3年、中野研究室）
- 柴田伽楽 同志社大学学部生（社会学部社会学科3年、藤本研究室）
- 王婧瑜 同志社大学大学院博士後期課程学生（社会学研究科メディア学専攻、勝野研究室）

司会:

- 江間有沙 東京大学准教授

学生によるパネルディスカッションでは、2024年度の調査に関わった3つの研究室を代表する学生3名が登壇し、江間准教授の司会で、調査を通して得た知見や気づきなどについて議論した。

まず、それぞれどのようなAIサービスを調査したかについて説明があった。王婧瑜・同志社大学大学院博士後期課程学生は、生活や仕事を支援するAIアシスタントサービスを対象に、チャットボットとして人間を補助する役割を担うソフトウェアを調査し、これを「デジタル・コワーカー」と分類した。柴田伽楽・同志社大学学部生は、広告代理店における生成AIの活用に関し、社内データをもとに社員の創造性を促すチャットボット型システムの運用を調査し、これも同様に人の成果を補完・促進する「デジタル・コワーカー」と位置づけた。佐藤裕章・東洋大学学部生は、農業におけるAI画像解析ソリューションなど、業務効率化を目的としたAI製品を広く調査し、こちらもまた、最終的な判断を人が担う点から補助的存在として「デジタル・コワーカー」と評価した。

次に、AIがもたらす働き方の変化に関して、王氏は選択式対話によるコミュニケーションの負担軽減が望まれる一方、パーソナライズ化のリスクも挙げ、慎重な導入を提言した。それに対し、柴田氏はAIによる経験の補完や創造的発想の刺激に着目し、佐藤氏は、AIによりインプットとアウトプットの速度が増し、成長や意思決定にかけられる時間が増える述べた。

続いて、AIによって忙しさが増す社会への認識については、佐藤氏がAIを成長の促進に役立つ起爆剤と捉え、柴田氏は適応の必要性和生産性向上の肯定的側面を指摘した一方、王氏は立ち止まって考える時間や対面コミュニケーションの重要性を強調した。

最後にAIのリスクと対処について、佐藤氏はAIのバイアス問題を挙げ、コンテンツフィルターやAI倫理委員会の役割に触れたほか、柴田氏はデータの権利問題や誤情報、プライバシー保護などを挙げ、組織内外で異なるリスクへの対処として、責任の所在やリテラシー向上の重要性を訴えた。王氏はAIへの情動的・感情的依存やサービス終了時の問題を挙げ、利用者側での対策に限らず、制度的な整備の必要性も提起した。

5. 教員によるパネルディスカッション

パネリスト:

藤本昌代 同志社大学社会学部・教授

勝野宏史 同志社大学社会学部・教授

中野雅史 東洋大学総合情報学部・教授

宮崎光世 兵庫大学現代ビジネス学部・教授

司会:

原山優子 東北大学名誉教授／GPAI「仕事の未来」2020-2021 年共同議長

教員によるパネルディスカッションでは、2024 年度の調査に関わった教員 4 名が登壇し、原山名誉教授の司会のもと、調査の指導を通して得た知見に加え、調査の意義や課題について議論した。

まず、各教授より AI 導入に関する企業の動向についての見解が示された。藤本昌代・同志社大学教授は、2021 年度では、先進的に導入する企業と行政での使用が見られ、2022 年度、2023 年度では、労働力不足の補完、後継者不足によるベテランの知識や技能の消失前での AI 学習（世代間垂直移動）、効率性目的では、業務の省人化、上級者のノウハウの AI 学習（レベル間垂直移動）、「バンドワゴン効果」による導入も増加し、女性職の専門職の仕事の代替も見受けられ、2024 年では、AI 利用に関する社会的倫理、リスク管理など、世界の最先端情報を取得し、ガバナンスに注力する企業と、それらについては AI サービス提供者に委ね、AI 活用・普及に注力する企業との間で AI 対応の二極化が進んでいると分析した。中野雅史・東洋大学教授は、過去 3 年間で人間と AI の関わり方が変化し、AI のリスク管理が注目される中で、人間が積極的に関与するケースと技術でリスクを制御しようとするケースが見られるようになったと述べ、企業規模によって導入形態に違いがある点や、地方自治体では推進体制の構築が導入成否を左右する点も指摘した。勝野宏史・同志社大学教授は、AI に対するリスク認識がこの 2 年で大きく変化し、倫理やガバナンスへの関心が高まっていること、企業による情報開示が進んでいることが印象的だったと語った。宮崎光世・兵庫大学教授は、2022 年には AI 導入企業が少なく調査が困難という側面があったが、2023 年には、ChatGPT の登場を受け、企業が対応に迫られたことで、再び調査が難しい時期が続いたと述べた。しかし 2024 年には、企業の多くが AI の活用フェーズに入り、調査が円滑に進むようになったと振り返り、今後は倫理的な問題が顕在化する段階に入るのではとの見解を示した。

続いて、今回の調査を通しての学生と企業の学習効果について勝野教授は、日本の学生にとっては、倫理を学問的に議論する機会が少ない中で、AI の利活用に関する具体的な事例やインタビューを通じて倫理について考えることは、非常に貴重な学びの機会となったと述べた。中野教授も、学生がビジネスマナーやメールの書き方を学びながら自信をつけ、就職活動にも良い影響があったと述べ、企業にとっても新人育成や AI 活用の在り方を見直す契機となったと評価した。また藤本教授も、学生が AI のポジティブ・ネガティブ両面を現場で学び、成長を実感したことを挙げるとともに、企業側の反応については、学生に対して積極的に教育的な姿勢を取る企業と、情報漏洩のリスクを懸念する企業の二極化が見られたが、学生への説明を通じて社内での議論が進んだといった声も聞かれ、企業にも一定の学びがあったと述べた。

最後に、調査活動の今後の展望として、宮崎教授は、これまでの「仕事の未来」ととどまらず、AI 導入に伴うトラブルや課題も含めて調査し、責任ある AI のあり方を探るべきだと提言した。中野教授は、

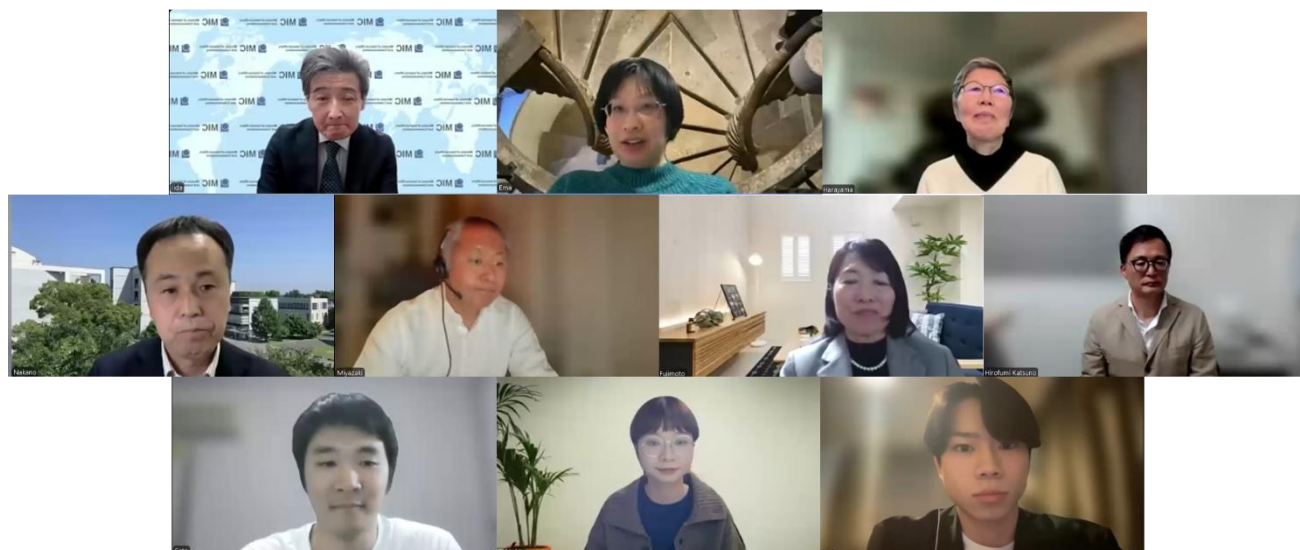
国際的な学生交流の成果を評価しつつ、今後のテーマ設定について統一感を持たせるか多様性を尊重するか議論が必要だと指摘した。藤本教授は、AI の普及が文系出身者も含む多様な人材に支えられており、社会的・文化的背景を理解する視点の重要性を強調したうえで、AI リテラシー教育の国際連携の推進に意欲を示した。勝野教授は、文理融合の観点や、過去の活動から得た知見を現場の課題解決に活かすことの重要性を述べ、卒業生とのネットワーク活用の可能性も示唆した。原山名誉教授は、責任ある AI の議論が重要性を増していることに加え、国際連携の持続的展開や、日本国内の大学の取り組みにおける統一性の検討、さらには文理融合を研究テーマとする意義についても言及し、世代間ネットワークの構築も今後の発展に資すると締めくくった。

6. 閉会挨拶

本イベントの閉会にあたっては、飯田陽一・総務省国際戦略局情報通信国際戦略特別交渉官より挨拶があった。

飯田氏は、これまで開催されてきたイベントにて学生の意見を聞く中で、新鮮な視点を得ており、特にデジタルネイティブ世代が AI を自然に受け入れている点が印象的だと述べた。また、AI の急速な進化に対応し、人間中心の AI 社会の実現にはガバナンスと実用化の両面からの取り組みが重要であり、GPAI の OECD 統合によってその体制が強化されたと指摘した。最後には、「エージェンティック AI」の現実化に伴い、AI との関わり方やルール整備を継続的に見直す必要性を強調し、日本が国際的な AI エコシステムの構築をリードすることへの期待を表明して、閉会挨拶が締めくくられた。

そしてこの挨拶を受け、江間准教授から「エージェンティック AI」に関する補足説明が、飯田氏、原山名誉教授に求められた。まず飯田氏は、中国で人間の指示を受けずに自律的にタスクを実行する AI が登場したことに多くの関係者が驚きを示している状況を共有しつつ、これを単なる脅威と捉えるのではなく、積極的に、ただし人間中心の活用方法を模索すべき段階にあると述べた。また原山名誉教授は、現在一般的な「AI アシスタント」から、人間の命令に基づき自律的に行動する「AI エージェント」、そして完全自律の一步手前にある「エージェンティック AI」へと進化する流れを解説し、エージェンティック AI には、①完全自律には至らない中間段階としての側面と、②人間の介在なしに判断・行動する能力を持つ可能性という側面があると指摘した。また、後者に関連して、「エージェンシー（自主性）」の概念が浮上し、人間と同様に AI もエージェンシーを持ち得るかという問いが重要になると述べ、エージェンティック AI の影響について議論するには、まず人間がどの程度コントロールできるかという視点が不可欠であり、この問題はもはや未来の話ではなく、現実の課題であると強調した。以上の補足説明を受けて江間准教授は、GPAI の調査における AI のカテゴリー分類も技術の進展に応じて見直しが必要であり、より高い解像度での分析が求められると述べ、本イベントの幕を閉じた。



(上段左から) 飯田氏、江間准教授、原山名誉教授
 (中段左から) 中野教授、宮崎教授、藤本教授、勝野教授
 (下段左から) 佐藤氏、王氏、柴田氏

参考リンク集

[GPAI ウェブサイト\(英語\)](#)

[GPAI Future of Work 作業部会ウェブサイト\(英語\)](#)

[GPAI 東京専門家支援センター](#)

[GPAI サミット 2022 の報告](#)

[【実施報告】 GPAI SUMMIT 2022 「仕事の未来」 サイドイベント：学生コミュニティとの対話](#)

[【実施報告】 GPAI 雇用の未来について考える：海外と日本から得られた知見](#)

[【実施報告】 GPAI 雇用の未来：Future of Work Survey Report 2021 報告](#)

[【実施報告】 GPAI 仕事の未来：Future of Work Survey Report 2022 報告](#)

[【実施報告】 GPAI 仕事の未来：Future of Work Survey Report 2023 報告](#)

[【報告書】 GPAI 仕事の未来：日本調査からの報告と提案](#)

[【報告書】 GPAI 仕事の未来 2022 年調査報告書](#)

[【報告書】 GPAI 仕事の未来 2023 年調査報告書](#)

報告書原案作成：狩野愛歌